九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

状態事態の過去の表現形式とその意味 : コピュラ文をめぐる英語とスペイン語の対照の観点から

山村, ひろみ
九州大学大学院言語文化研究院言語科学部門・言語教育学

https://doi.org/10.15017/6796463

出版情報：言語科学. 41, pp.27-55, 2006-09-30. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：

状態事態の過去の表現形式とその意味
ーコピュラ文をめぐる英語とスペイン語の対照の観点からー*

山村　ひろみ

1. はじめに

従来, Vendler の「状態(state)」に分類される英語の事態はアスペクト的には imperfective であり, それゆえ be+ing の進行形にはならない, と解釈されることが多い[1]. 一方, スペイン語の過去形には, 一般に, アスペクト的に perfective とされる pretérito perfecto simple(以下, ps.)と imperfective とされる pretérito imperfecto(以下, imp.)の二つの形式がある. このスペイン語の過去形に見られる2つの形式はほとんどすべての事態に適用されるため, スペイン語における状態事態は imperfective の形式のみならず perfective の形式によっても表出されることになる. 本稿は, このように, これまで専ら imperfective と理解されてきた英語の状態事態, とりわけ be 動詞に代表されるコピュラ文の過去形式をそれに対応するスペイン語の過去形式と比較対照させると同時に, スペイン語の ser コピュラ文の過去形式をそれに対応する英語の過去形式と比較対照させることにより, ①英語の状態事態の過去表現とスペイン語の状態事態の過去表現の対応関係を明らかにし, ②英語における imperfective/perfective とスペイン語における imperfective/perfective の類似点ならびに相違点を指摘し, ③これまで状態事態と呼ばれてきた事態の時間構造およびそれを支える話し手の認知のあり方について再検討を加える, ことを目的とする.

以下, 本稿の構成は次のとおりである. まず続く第2節では, 英語とスペイン語において imperfective と perfective がどのように解釈されてきたかを, 特に, 状態事態に注目しながら述べる. そして, 第3節では第2節での議論を踏まえ, 英語の be 動詞コピュラ文の過去形式のあり方とスペイン語の ser コピュラ文の過去形式のあり方を, 英語で書かれた小説のスペイン語訳およびスペイン語で書かれた小説の英語訳を基に観察する. さらに第4節では, 第3節の観察結果に基づき, 英語とスペイン語の状態事態の過去形式の振る舞いをまとめると同時に, そこから状態事態の時間構造を再検討する. そして最後の第5節では, それまでの議論の総まとめをする.

2. 英語とスペイン語における imperfective と perfective

2.1. 英語における状態事態とアスペクト

アスペクトの古典ともいえる Comrie(1976:3)は "[a]spects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation" と定義した上で, " [p]erfectivity indicates the view of a situation as a single whole, without distinction of the various separate phrases that make up that situation; while the imperfetive pays essential attention to the internal structure of the situation."(Ibid.:16)と述べている. これまで英語におけるアスペクトについては, この Comrie の定義に従った形で, いわゆる be+ing を imperfective の代表とすることが一般的であったが, それに合わせて, 状態事態 (stative situation) が be+ing によって表出されにくいのは同事態が be+ing と同じく imperfective だからである, と述べられることが多かった(Vlach 1991, Dowty 1986, Parsons 1989). 中でも Vlach(1991:273-274)は次のような例をあげ, be+ing と状態事態は同じ「状態性」を共有すると主張した.

---

* 本稿は2006年2月18日神戸市外国語大学で開催された関西スペイン語学研究会で発表した内容および2006年7月1日西南学院大学で開催された西南言語対照研究会で発表した内容に修正加筆したものである. 当日貴重なご意見・ご助言をいただいた方々に記して謝意を表したい.

[1] Cf. 樋口(2004), p.63.

1. a. Max was here when I arrived.
   b. Max was running when I arrived.
   c. Max ran when I arrived.

つまり，Vlachは，(1a)の[Max be here]という事態も(1b)の[Max be running]という事態も従属節の示す「私の到着」という事態が生起する以前から起こっていることを含意しており，そのような含意を持たない(1c)とは著しい違いを見せる，したがって，状態事態とbe+ingは類似すると結論づけたのである．そして，Vlachはこのような状態事態とbe+ingの類似性に基づきながら，"The function of the progressive operator is to make stative sentences, and, therefore, there is no reason for the progressive to apply to sentences that are already stative."(Ibid.:274)と述べた．これまで英語の状態事態をアスペクト的にimperfectiveと判断してきた研究者の多くは，このようなVlachと同じ立場を取っている[2].

しかしながら，英語の研究者の中には，これまで自明とされてきた状態事態のimperfectivityに対して疑義を持つものも出てきている．その代表がSmith(1991)である．Smith(1991)によれば，アスペクトはsituation typeとviewpointという二つの基本的構成要素から成る．このうち前者のsituation typeは事態の内的時間構造によるカテゴリー化を示したものでいわゆるAktionsartに対応するものと言ってよい．一方，後者のviewpointは一事態に対する話者の観点を示したもので接辞など文法的形態素によって表示されるということから，これまでの文法的アスペクトに相当するものと考えられる．このようにアスペクトをsituation typeとviewpointに二分するSmithにとって，従来の文法的アスペクトに対応するviewpointは次のように理解されている．

"The information made visible by aspectual viewpoint is essential to the semantic and pragmatic interpretation of a sentence. Informationally perfective viewepoints are closed, in the sense that they present situations as complete with both endpoints. Imperfectives are open, in the sense that they present situations as incomplete, with neither endpoint. Neutral information given by a nuetral viewpoints is not identical to that of an imperfective." (Smith 1991:100, 下線は山村．)

このSmithのperfectiveとimperfectiveの解釈－perfective viewpointは当該事態を両終点（開始点と終結点）を持った完結した（閉じた）ものとして提示し，imperfective viewpointは当該事態を開始点も終結点も持たない不完結な（開いた）ものとして提示する－はこれまで提出されてきた多くのアスペクト論の解釈と違わない．問題はこのようなimperfective解釈を取るSmithが英語の状態述語に対してどのような解釈をしているかであるが，それを知るためにはSmithによる英語のviewpointsとsituation typesとの関係付けを見ておく必要がある．以下を参照されたい．

" The perfective viewpoint appears with sentences of all situation types. For English this viewpoint has a consistent yet variable meaning: the perfective presents in its entirety the temporal schema associated with each situation type. Non-statives are closed in the perfective,

---

[2] 英語の状態事態がbe+ingによって表出されないという現象についてはこれまでいろいろな議論があった．周知のように，英語の状態事態の中にはJohn is being stupid.のように問題なくbe+ingによって表出されるものもあるからである．このようなbe+ingによる表出が可能な状態事態については，「be+ingによって表出される限りにおいて非状態である，少なくとも，非状態的に使用されている」という解釈が一般的であったが，この議論は便宜的なものに見えなくもない．というのも，一方では，*John was knowing that.のようにbe+ingによる表出が不可能なものもあるからである．問題はこのように同じ「状態」と分類される事態間にbe+ingによる表出が可能なものとそうでないものがあることを認識し，その上で，なぜ当該事態がbe+ingによる表出が可能になるのかを説明することにあると思われる．

while statives are open because their temporal schema does not include endpoints." (Ibid:220, 下線は山村．)

まず，上記の引用文を理解するにあたっては，Smith にとって英語の perfective viewpoint はその simple past によって示されるものであるという点を確認しておきたい．その上で，この引用文を解釈すると次のようになる．perfective viewpoint を持つ simple past はすべての事態に適用されるが，perfective viewepoint が示す時間的スキーマ(temporal schema)はその対象となる事態によって異なる．すなわち，perfective viewpoint を持つ simple past が終点（endpoints）を有する非状態事態(non-statives)に適用されると当該事態は closed となるが，終点を持たない状態事態に適用されると当該事態は open となるのである．ここで注目すべきは，状態事態と perfective viewpoint の関係である．先に見た引用文で，perfective viewpoint は当該事態を開始点と終結点の両方を持った閉じた事態ものとして提示すると述べているにもかかわらず，英語の状態事態はその時間的スキーマに終点を持たないがゆえに，perfective viewpoint の simple past で表出されても当該事態は開いた(open もの)として提示されると述べているからである．この Smith の記述は，開始点と終結点の存在を前提とする perfective viewpoint とそれらの点を欠いた「状態(state)」という situation type の折り合いを無理やりつけようとしたがために，却ってその矛盾を露呈した形になったもののように見える．英語の状態事態と perfective viewpoint に関する Smith の戸惑いは次の記述にも伺える．

" In contrast, stative sentences with the perfective viewpoint－the only viewpoint neutrally available to such sentences－are flexible in interpretation. (...) The schema of a state does not include its endpoints, because the endpoints involve change of state. States merely consist of a single undifferentiated period. Stative senteces in the perfective viewpoint are therefore compatible with either a closed or open interpretation, depending on context." (Ibid:221, 下線は山村．)

上の引用文によれば，perfective の simple past によって表出された英語の状態事態は文脈によって「閉じた」事態として解釈されることもあれば「開いた」事態として解釈されることもあるということになる．Smith は，これを説明するために，以下の例をあげている．

2. i) Sam owned 3 peach orchards last year.
   ii) a. Sam owned 3 peach orchards last year, and he still owns them.
   b. Sam owned 3 peach orchards last year, but he no longer owns them.

Smith によれば，状態事態である[Sam own 3 peach orchards]が perfective viewpoint を持つ simple past で表出された場合，(iia)のように and という接続詞を介した open 解釈も，(iib)のように but を介した closed 解釈も可能である，ゆえにその解釈を決定するのは pragmatic inference であると述べているのである．このような Smith(1991)に見られる英語の状態事態に対するアスペクトの解釈は，確かに，Vlach のように専ら be+ing との類似性から同事態を imperfective と判断してきた従来の見方とは異なっていると言えるだろう[3]．

以上，英語の状態事態がアスペクト的にどのように解釈されているかを簡単に見た．その結果，同事態は be+ing との類似性からアスペクト的に imperfective と判断する見方と，同事態のアスペクトは文脈によって imperfective になることもあれば perfective になることもあると判断する見方がある

[3] とはいえ，be+ing に対する Smith の解釈は，他の研究者と同じく imperfective (viewpoint)を持つというものである．また，be+ing によって表出された状態事態に対する解釈も従来と変わらず，そのような事態はすでに「状態」ではなく「イベント」として解釈されているというものである．Cf. Smith(ibid.:222)

ことが分かった.

2.2. スペイン語における状態事態とアスペクト

スペイン語のアスペクトについては，一般に，過去の二つの単純形式間の機能的差異を perfective 対 imperfective というアスペクトの違いにあるとする説がよく知られている．この通説に従えば，過去の単純形である pretérito perfecto simple (以下，ps.と略記)はアスペクト的に perfective であり，同じく過去の単純形である pretérito imperfecto (以下，imp.と略記)はアスペクト的に imperfective と解釈されることになる．この perfective と imperfective の解釈は先に見た Comrie(1976), Smith(1991)のそれと大きな違いはない．以下を参照されたい．

" Retomando la metáfora de la lente,en el aspecto Imperfecto sólo podemos ver una parte interna de la situación pero no podemos ver ni el principio ni el final de la situación. (...) En el Aoristo o Perfectivo, en cambio, el tiempo de la situación coincide con el tiempo focalizado, es decir, la lente nos permite ver la situación completa, desde su inicio hasta su fin." (García Fernández 1998:20)
（レンズの比喩を再び用いるならば，Imperfecto アスペクト（=imperfecive，山村）では事態内部の一部分だけを見るだけでその始点も終点も見ることはできない．(中略) 一方，アオリストあるいは Perfecticvo アスペクト（=perfective，山村）では，事態の時は焦点化された時間と一致する，すなわち，レンズを通して完結した事態，その始点から終点までを見ることができるのである.）

これはスペイン語の過去の二形式の機能的差異をアスペクトというカテゴリーを用いて説明しようとする「アスペクト説派」の perfective と imperfective のもっとも代表的な解釈である[4]．上述したように，この解釈自体は Comrie のアスペクトの一般的解釈，Vlach や Smith の英語のアスペクト解釈と違わない．しかしながら，この各アスペクトが適用されることになる事態の範囲に違いがある点を看過してはならないだろう．今，問題を過去形に限るならば，先に見たように，英語の過去形において perfective アスペクトを有するのは simple past であり，imperfective アスペクトを有するのは (Smith にとっては文脈によるという保留つきではあるが) 状態事態ならびに非状態事態に適用された be+ing ということであった．それに対し，スペイン語の imperfective である imp.は非状態事態・状態事態の区別なくすべての事態に適用され，同様に perfective である ps.もほとんどの事態に適用されるのである[5]．このことを踏まえるならば，imperfective とされる英語の状態事態の過去形は，スペイン語では imperfective の imp.のみならず perfective の ps.によっても表出される可能性があるということになる．そして，もしそれが英語とスペイン語の比較対照によって実際に確認されるならば，英語の状態事態のアスペクト的価値は新たに考察の対象になってくることであろう．また同様に，スペイン語の imp.あるいは ps.によって表出された状態事態の英語における対応形式を観察することにより，これら二形式の機能に再検討を加えることも可能になるであろう．以上のことから，次節では，英語の小説中に出現する過去の状態事態がそのスペイン語による翻訳版ではどのように表現されているか，また逆に，スペイン語の小説中に出現した過去の状態事態がその英語による翻訳版ではどのように表現されているかを具体的に観察していく．

3. 観察

---

[4] スペイン語の ps.と imp.の機能的差異に関しては，基準時とそれに対する時間関係から説明しようとする「時間説派」も存在する．その代表としては Rojo(1974, 1976, 1990)，Rojo & Veiga (1999)，山村(1996, 1997b)，Yamamura(2000,2001, 2003)などがある．

[5] スペイン語の ps.による表出は imp.による表出よりも制約があり，特に状態事態の中には ps.による表出が極めて難しいものがある．この点については山村(1997a, 1998)を参照されたい．

3.1. 対象

英語とスペイン語における過去の状態事態の表現形式を比較対照するにあたり，本稿はいわゆるコピュラ動詞からなる文を対象とすることにした．英語で言えば be 動詞からなる文であるが，今回の調査では be+ing からなる進行形，be+pp.からなる受身文は対象外とした．一方，スペイン語のコピュラ動詞については若干説明しておく必要がある．スペイン語には ser と estar の 2 種類のコピュラ動詞があるからである．この 2 つのコピュラ動詞の違いについてはこれまでにも様々な解釈が提示されてきたが，今回の調査では取り合えず，ser は補語として名詞句・形容詞句・副詞句・前置詞句を取りながら主語の「属性・特徴」を表出するのに対し，estar は補語として形容詞句・副詞句・名詞句を取りながら主語の「一時的状態」および「主語の所在」を表すと理解しておく．本調査では，このように理解された 2 つのコピュラ動詞のうち，まず ser 動詞からなるコピュラ文を対象として取り上げることにしたが，英語の場合と同様に，ser+pp.からなる受身文は対象外とした[6]．そして，estar 動詞からなるコピュラ文については，英語からスペイン語への翻訳において，英語のコピュラ文に対応するものとして出現するときのみ対象とすることにした．

3.2. 資料体と方法

次に，今回の調査に用いた資料体と調査方法について述べておく．まず，英語の過去のコピュラ文がスペイン語においてどのように表現されるのかを調査するのにあたり用いた資料体は，Agatha Christie の短編集 *The Thirteen Problems* の中の最初の 3 作品（*Tuesday Night Club, The Idol House of Astarte, Ingots of Gold*）の英語版とそのスペイン語訳版である．一方，スペイン語の ser コピュラ文の過去形が英語のどのような形式に対応するのかを調べるのにあたり用いた資料体は，Arturo Pérez-Reverte の *La piel del tambor* のオリジナル版とその英語訳版である．本調査ではこれらの資料体を用いながら，以下の方法でデータを抽出していった．

最初に，英語の simple past がスペイン語のどのような表現形式に対応するのかの全体像を掴むために，simple past に対応するスペイン語の形式すべてを抽出した．その後，simple past とそれに対応するスペイン語の形式を Vendler 流に状態事態と非状態事態に分け，そのそれぞれがスペイン語の ps.に対応しているか imp.に対応しているかによって整理した．そして，さらに状態事態の中で英語の be 動詞からなる文がスペイン語のどのような表現形式に対応しているかをチェックした．次に，スペイン語の ser コピュラ文の過去形，すなわち，ps.によって表出された ser コピュラ文と imp.によって表出された ser コピュラ文が英語においてどのように表現されているかをチェックし，対応する英語の形式を be 動詞か否か，simple past か否か等により整理した[7]．以上の方法に基づき資料体を調査・観察した結果は 3.3.のようにまとめられる．

---

[6] スペイン語には英語の be+ing に相当すると言われる estar+ndo という迂言形式もある．しかし，これは estar 動詞からなるものなので今回の調査では対象外とする．

[7] 英語版からスペイン語版への対応関係の調査に従うならば，スペイン語の ps.と imp.が英語のどのような形式に対応するのかを逐一調べる必要があるが，今回それは行わなかった．その理由は，ps.と imp.の多くは英語の simple past に対応するだろうと予想したからである．換言するならば，英語の simple past がスペイン語の ps./imp.のどちらに対応するかは調べてみなければ分からないが，スペイン語の ps./imp.は基本的には英語の simple past に対応するだろうと考えたわけである．結果的に言えば，筆者のこの予想は大筋では正しかったが，修正を求められる点がなかったわけではない．スペイン語の ps./imp.によって表出された ser コピュラ文に対応した英語の文の中には数は少ないものの had been という過去完了によって表出されたものもあったからである．なお，このスペイン語の ps./imp.と英語の過去完了との対応関係については，非状態事態においても確認されている(山村 2006)．これらの事実に従うならば，スペイン語の ps./imp.は必ずしも英語の simple past に対応するわけではないということになるが，本稿ではこのことを指摘するに留め，詳しい考察は別稿に譲りたい．

3.3. 結果

3.3.1. 英語のコピュラ文に対応するスペイン語の過去形

3.3.1.1. ps. か imp. か？

英語のコピュラ文がどのようなスペイン語の過去形式に対応するかを見る前に，まず，英語の simple past 全体がスペイン語のどのような過去形式，具体的には ps./imp.のどちらに対応しているかを見ておこう．先にあげた英語の 3 作品に出現する simple past を非状態事態と状態事態に分け，ps. と imp.のそれぞれによって表出された頻度数をまとめると表 1 のようになる．

表 1．英語の事態とスペイン語の ps./imp.の対応関係

	Tuesday Club		The Idol House		Ingots of Gold	
	ps.	imp.	ps.	imp.	ps.	imp.
simple past　非状態	125(92%)	11(8%)	168(96%)	9(4%)	139(97%)	15(3%)
simple past　状態	30(41%)	43(59%)	60(44%)	68(56%)	46(43%)	60(57%)

上の表からは次のことが分かる．まず，英語の非状態事態はスペイン語の ps./imp.のどちらにも対応するが，その表出の可能性からすると ps.になることが圧倒的に多い．このことから，英語の非状態事態の simple past はスペイン語の非状態事態の ps.による表出にほぼ対応すると考えられる．他方，英語の状態事態は，ps./imp.のどちらにも対応するが，その表出の可能性をみると，ps.と imp.の間で大きな差はない．この結果からすると，2.1.で見た英語の状態事態を専ら imperfective とする解釈にはいささか問題があると考えられる．もし英語の状態事態が imperfective アスペクトを有するものだとすれば，同じく imperfective とされるスペイン語の imp.によって表出される割合がもっと高くなると予想されるからである．とはいえ，今回の調査で抽出された状態事態が，be 動詞のように極めて「状態性」の高いものから，see といった知覚動詞，know といった精神・思考動詞など，主語の意志性や他動性を問うことができるものまで，様々な種類を含んでいることを考慮すると，表 1 の結果は慎重に扱う必要があろう．つまり，英語の状態事態の simple past による表出のアスペクト的価値を探るには，なるべく状態事態の「状態性」について疑問のない事態に焦点をあてその実態を観察すべきなのである．そこで，次に，状態事態のうち特に「状態性」が高いと思われる be 動詞からなる文だけを取り出し，その ps./imp.の表出の可能性を見てみる．

表 2．英語の be 動詞からなる文とスペイン語の ps./imp.の対応関係

	Tuesday Club		The Idol House		Ingots of Gold	
	ps.	imp.	ps.	imp.	ps.	imp.
simple past　be 動詞	10(33%)	20(67%)	27(38%)	45(62%)	22(37%)	38(63%)

表 2 によれば，「状態性」の極めて高い be 動詞からなる文も，ps.と imp.の両方の形式によって表出される可能性があることが分かる[8]．確かに，表 1 で見た状態事態全体の ps./imp.による表出の割合に比べると，be 動詞の ps.による表出の割合はいささか低く imp.によって表出される可能性の方が高くなるという違いはあるが，それでも当該事態における ps./imp.の割合は先に見た非状態事態における ps./imp.の割合とは大きく異なっている．英語の非状態事態の simple past はほとんどの場合スペイン語の ps.に置換されると言えるが，be 動詞からなる事態の simple past の置換が ps.と imp.のど

[8] be 動詞の simple past に対応するスペイン語の ps./imp.の数字にはスペイン語のコピュラ動詞 ser/estar の他，一般動詞の ps./imp.も含まれている．

ちらになるかは簡単に判断できないからである[9].

以上，英語の be 動詞からなる文の simple past とそれに対応するスペイン語文の ps./imp.による表出の関係の概要を見た．次項では，スペイン語の ps.に対応した be 動詞からなる文およびスペイン語の imp.に対応した当該文をより詳しく観察し，両者の違いを具体的に考えてみたい．

3.3.1.2. スペイン語の ps. によって表出された英語のコピュラ文

まず，be 動詞からなる文がスペイン語のコピュラ動詞の ps.に対応した例から見ていく．表 2 で見たスペイン語の ps.に対応した英語の be 動詞 59 例のうち，スペイン語のコピュラ動詞の ps.に対応したものは，ser の ps.が 24 例(40.7%)，estar の ps.が 2 例(3.4%)であった．以下を参照されたい．

3 a. Suddenly Diana began to laugh hysterically. It <u>was</u> a strange horrible sound breaking the silence of the glade. (Idol)[10]

b. De pronto, Diana comenzó a reírse histéricamente. <u>Fue</u> un sonido extraño y horrible que rompió el silencio del claro.

4 .a "My God!" said Richard Haydon, and the sweat sprang out on his brow. But Violet Mannering <u>was</u> sharper.

b. —¡Cielo santo!—exclamó Richard mientras su frente se perlaba de sudor. Pero Violet Mannering <u>fue</u> más aguda. (Idol)

(3b)は be+名詞句からなる文，(4b)は be+形容詞からなる文がスペイン語の ser の ps.に対応した例である．この両者に共通するのは，話し手が当該文の示す内容を直接知覚したことを表しているという点である．すなわち，(1ab)は突然ヒステリックに笑い出した Diana の声を聞いた話し手が，それを a strange horrible sound/un sonido extraño y horrible と知覚・認識したことを示し，(2ab)は Violet Mannering の叫び声が，その前に声をあげた Richard のそれよりも sharper/más aguda だったと話し手が知覚・認識したことを示しているのである．このような話し手を取り巻く環境において生起した事態の直接的知覚・認識を示すコピュラ動詞の過去形は，先に見た Vlach の解釈では説明できないものである．Vlach によれば，典型的な状態事態である be 動詞の simple past は be+ing の同形式による表出と同じく，基準とする事態が生起する以前から存在していることを示すものであったが(2.1.の例文(1ab)参照)，ここであげた例はいずれも前文が示す事態が成立した後に生起した，いわば継起的生起であることが明らかだからである．また，これらの例は Smith の説明とも相容れない．Smith によれば，状態事態の simple past による表出は文脈により imperfective に解釈されることもあれば perfective に解釈されることもあるということであったが，その際の perfective とはあくまで当該事態の「終結」，言い換えるならば当該事態の発話時における「無効」を示すものであった(2.1.の例文(2ab)参照)．しかし，ここで取り上げた英語の be 動詞はアスペクト的に perfective とされるスペイン語の ps.に対応しているにも拘わらず，Smith のこのような解釈には合致していない．先述したように，(3ab)(4ab)のコピュラ文が表出しているのは，話し手が当該文の表わす内容を知覚・認識

---

[9] このように英語の状態事態，とりわけ be 動詞からなる文の simple past とスペイン語の ser 動詞からなる文の ps/imp.の対応関係は簡単に予想がつかないため，スペイン語を学習する英語母語話者にとって ser 動詞の ps.と imp.の使い分けはもっとも習得が困難な項目のひとつになっていると言う．Cf. But & Benjamin(2000), p.205.

[10]例文の出典については，次の略語を用いる．Tuesday Club = Tuesday, The Idol House of Astarte = Idol, Ingots of Gold = Ingots. また，オリジナルの文は a，それに対応する翻訳文は b で示す．さらに問題となる動詞部分は下線で示す．

した，つまり，当該事態が成立したというそのことのみだからである[11].

このような話し手の直接的知覚・認識の成立を示すスペイン語の ser の ps.，またそれに対応する英語の be 動詞の simple past と時を表す副詞句が共起すると，その副詞句は当該事態の成立時を示すことになる.

5. a. I had slept well enough that first night, but the next night my sleep <u>was troubled</u> and broken. (Ingots)
   b. La primera noche había dormido bastante bien, pero la siguiente mi sueño <u>fue</u> intranquilo y entrecortado.

(5ab)に出現した the next night/la siguiente (noche) という時の副詞句は，[my sleep be troubled and broken/mi sueño ser intranquilo y entrecortado]という命題が成立した時を示す．言い換えるならば，my sleep/mi sueño が話し手によって troubled/inranquilo と知覚・認識されたのは the next night/la siguiente(noche)に他ならず，それ以前でもそれ以後でもないのである．ここでもまた Vlach および Smith の主張は simple past によって表出された英語のコピュラ文の実態とは齟齬を起こすことが分かる.

ところで，simple past によって表出された英語の be 動詞は，以下のように，スペイン語の estar の ps.に対応することもある.

6. a. The question is, was the gold stolen before the wreck or afterwards ? <u>Was</u> it ever in the strong room at all ? (Ingots)
   b. La cuestión es, ¿ fue robado el oro antes o después del naufragio ? ¿ <u>Estuvo</u> alguna vez siquiera en la cámara acorazada ?

(6ab)に出現したコピュラ文の過去形も(3)(4)(5)で見たコピュラ文と同じように解釈できる．すなわち，当該文が問題にしているのは命題 [it be in the strong room/(el oro) estar en la cámara acorazada]が発話時以前に成立したか否かなのであり，その「終結性」の有無ではない．それは，当該文に頻度を示す副詞 ever/alguna vez が共起していることからも分かる.

次に，be 動詞が there 構文の一部として出現した場合のスペイン語の ps.による対応を見てみる．一般に，存在を示す英語の there 構文はスペイン語の hay 構文に対応するとされる．今回の調査でも，simple past によって表出された there 構文の半分(4 例)は ps.によって表出された hay 構文に対応していた[12]．次例を見られたい.

7. a. There <u>was</u> a few moments silence and then Raymond said: (Tuesday)
   b. <u>Hubo</u> unos instantes de silencio y luego Raymond dijo.

(7ab)は Smith の言う perfective な状態事態に対応するものである．当該文では a few moments/unos instantes という期間を示す語句が共起し，当該事態がその語句が示す間だけ有効であり，それ以後は無効となったことが明示されているからである．しかしながら，ここで注目すべき

---

[11] このことは Smith が「終結性」の有無を検証する際に用いた no longer という副詞句が当該文と共起しにくいことによって示される．Suddenly Diana began to laugh hysterically. It <u>was</u> a strange horrible sound breaking the silence of the glade, ?? but it is no longer a strange horrible sound breaking the silence of the glade.

[12] there 構文の simple past による表出は全部で 8 例あった．このうちスペイン語の hay 構文の ps.に対応したものは 4 例(6.8%)であり，残りの 4 例は一般動詞の ps.による表出に対応していた.

は，このような当該事態の終結性の表出ではなく，むしろ ps.の hay 構文に対応した there 構文の意味的特徴と考える．スペイン語の ps.によって表出された there 構文中の名詞句のほとんどが，(5ab)の silence/silencio のような「行為・出来事」を表す抽象名詞だからである[13]．このことは上で見たスペイン語の ps.に対応していたコピュラ動詞の振る舞いと並行して考えることができるだろう．ps.の hay 構文に対応した英語の there 構文が ps.によって表出されたスペイン語のコピュラ文に対応した英語の be 動詞文の場合と同じく話し手による当該事態成立の直接的知覚・認識を表すのだとしたら，そのような there 構文中に出現する名詞句としては話し手の知覚・認識に直に訴えることのできる「行為・出来事」名詞こそ相応しいと思われるからである．換言すれば，スペイン語の ps.によって表出された hay 構文，また，それに対応する英語の there 構文は，同構文中に出現した名詞句が表わす事態の「出現」を表出するということである．

以上，スペイン語の ps.に対応した英語の be 動詞は話し手による当該事態成立の知覚・認識を示すと述べてきたが，これは次に見るスペイン語の一般動詞の ps.に対応した be 動詞にもあてはまる[14]．

8. a. 'It was a very dreadful night, none of us could sleep, or attempt to do so. The police, when they arrived, were frankly incredulous of the whole thing. (Idol)
   b. Fue una noche horrible, nadie pudo conciliar el sueño, ni intentarlo siquiera. La policía, cuando llegó, se mostró del todo incrédula ante lo ocurrido.

(8a)の be 動詞の simple past は警察が事件現場に到着した「後」の彼らの反応を示したものであり，話し手による当該事態成立の知覚・認識を表出しているという点ではこれまでと同様である．ただ，今まで見てきた be 動詞がスペイン語のコピュラ動詞 ser の ps.に対応していたのに対し，ここでは mostrarse...(...という態度を見せる)という再帰動詞の ps.に対応している点が異なっている．つまり，(8ab)は「状態性」の極めて高い英語の be 動詞の simple past は，スペイン語の非状態事態の ps.に対応することもあるということを明示しているのである．この英語とスペイン語の間に見られる対応する動詞の違いはこれまでの解釈を無効にするものではなく，むしろ逆に，それを補強するものと思われる．なぜなら，それはスペイン語の ps.に対応する英語のコピュラ文の「非状態性＝出来事性」を如実に示したものと言えるからである[15]．

以上，スペイン語の ps.に対応した英語の be 動詞文を見てきた．その結果，当該の英語コピュラ文は，話し手による【当該事態成立の直接的知覚・認識】を表出していることが分かった．このような英語コピュラ文の意味・機能は，従来の「英語の状態事態は，be+ing と同じく，その開始点にも終結点にも言及しない imperfective なもの」とする見方，また，Smith の「終結点を標示する perfective

---

[13] スペイン語の ps.に対応した there 構文 8 例のうちいわゆる「出来事」名詞を従えていたのは 7 例だった．その内訳は silence/silencio(3 例)，cry/grito(2 例)，outcries/exclamciones(1 例)，pause/pausa(1 例)である．唯一の例外は次の 1 例だった． "Look here," he said. "I am going back to the grove. That weapon has got to be found." "If there was a weapon, " I said doubtfully./—Escuche. Voy a volver al bosque. Hay que encontrar el arma. —Si es que la hubo—dije en tono dubitativo. (Idol) この例の名詞句は weapon/arma という物を示す普通名詞である．この there 構文がスペイン語の hay の ps.に対応したのは，この名詞句の示す物体(weapon/arma)が実際に存在したのか否かが問題になると解釈されたからだと思われる．

[14] スペイン語の ser の ps.に対応した be 動詞文の中には，このほかに次のような強調構文の形式を取っているものもあった．It was then that he became increasingly certain that someone was watching him./Fue (ps.)entonces cuando tuvo(ps.) la sensación de que alguien le observaba desde el cinturón de árboles. (Idol) このような ser の ps.の出現は，従属節中の動詞の時制に一致するという意味において，統語的操作の結果と考えられる．

[15] (7ab)のように，be 動詞の simple past がスペイン語の非状態事態の ps.に対応した例は 59 例中 28 例だった．

な状態事態」という解釈とも相容れないものである．次項では，ここで見たps.とは逆に，imperfectiveと理解するのが通説になっているスペイン語のimp.に対応した英語のbe動詞文の実態を見ていく．

3.3.1.3. スペイン語のimp.によって表出された英語のコピュラ文

まず，スペイン語のps.に対応した英語のbe動詞文の場合と同じく，当該文がスペイン語のコピュラ動詞のimp.に対応した例から見ていく．表2で見たスペイン語のimp.に対応した英語のbe動詞103例のうち，スペイン語のコピュラ動詞のimp.に対応したものは，serのimp.が39例(37.9%)，estarのimp.が27例(26.2%)であった．ここでbe動詞のsimple pastがスペイン語のser動詞のps.によって表出されるか，あるいはimp.によって表出されるかということに注目すると，imp.になることが多いと言うことになる．今回の調査では，スペイン語のser動詞に対応したbe動詞のsimple past全63例のうち，ps.に対応したもの24例(38%)，imp.に対応したものは38例(62%)だったからである．一方，スペイン語のestar動詞に対応したbe動詞のps./imp.による表出の可能性を見ると，ps.は2例(7%)，imp.は27例(93%)となり，imp.に対応することが圧倒的に多くなる[16]．以上のことから，英語のbe動詞のsimple pastは，取りあえず，スペイン語のコピュラ動詞のimp.に対応することが多いと結論づけられることになろうが，これはもちろんbe動詞のsimple pastが常にスペイン語のコピュラ動詞のimp.に置き換えられることを意味するものではない．したがって，be動詞のsimple pastがいつスペイン語のコピュラ動詞のps.に対応し，いつimp.に対応するのかを明らかにすることが重要な課題となってくる．そこで，以下，スペイン語のコピュラ動詞のimp.に対応したbe動詞文を検証していくにあたっては，特に，前項で見たスペイン語のps.に対応したbe動詞文との相違点に焦点をあて見ていくことにする．まずは，以下の例を見られたい．

9. a. He was a good-looking man in a kind of coarse, florid way, aged about fifty. His wife <u>was</u> a rather common place woman, of about forty- five. (Tuesday)
   b.Un hombre atractivo en cierto modo, jovial y de unos cuarenta años. Su esposa <u>era</u> una mujer bastante corriente, de unos cuarenta y cinco años.

10. a. Yet once, when I <u>was</u> a young man, I had one very strange and tragic experience. (Idol)
    b. No obstante, en cierta ocasión, cuando <u>era</u> joven, tuve una extraña trágica experiencia.

11. a. He <u>was</u> a right-handed man, was he not ? (Idol)
    b. Él <u>era</u> diestro, ¿ verdad ?

スペイン語のserのimp.に対応したbe動詞文は，既定の過去時における指示対象の「属性」を表出する．そして，この「属性」は，上の例に出現した補語a rather common place woman of about forty-five/una mujer bastante corriente de unos cuarenta y cinco años, a young man/joven, a right-handed man/diestroの特徴からすると，自分を取り巻く環境とのinteractionから生まれた話し手自身の個人的認識・評価というよりは，むしろ，いわゆる「世間知」に基づいて話し手が指示対象に貼り付けたレッテルのようなものと言える[17]．このように考えるならば，次のように同一の形容詞を補語とするコピュラ文の解釈上の違いも明らかになってくる．

---

16 スペイン語の2つのコピュラ動詞の間に見られるps.あるいはimp.による表出の可能性の違いは，両者の語彙構造を考える上で無視できないものであるが，本稿では扱わない．

17 これまでの議論から分かるように，自分を取り巻く環境とのinteractionから生じた話し手自身の知覚・認識を表出するのがスペイン語のserのps.による表出であり，それに対応するbe動詞のsimple pastである．

12. a. My first evening was a most charming and instructive one. (Ingots)
    b. Mi primera noche allí fue(ps.) deliciosa e instructiva.
12'. a. The place was a charming one; it was situated high up the cliffs, (Ingots)
    b. Era(imp.) un lugar encantador, situado sobre los acantilados,

(12a)(12a')は同じ charming という形容詞を含む補語を従えた be 動詞文であるが，前者はスペイン語の ser の ps.に対応し，後者は imp.に対応している．上で述べたことに従うならば，この ps.と imp.の違いは次のように考えることができるだろう．ser の ps.に対応した(12a)は，自分が経験(=interact)した最初の夜を話し手自身が charming なものと評価したという意味での【当該事態の成立】を表出しているのに対し，ser の imp.に対応した(12')は，当該の過去空間に予め存在していた指示対象(the place)が世間の標準に照らし合わせてみれば charming という「属性」を持つものだったということを表しているに過ぎないのである．

次に，スペイン語の ser の imp.とそれに対応した be 動詞の simple past の時間的特徴について触れておく．先に見た ser の ps.およびそれに対応した be 動詞の simple past は，前文に対して継起的関係を示すことができたが(3(ab), 4(ab)参照), ser の imp.およびそれに対応した be 動詞の simple past はそのような時間的関係を示さない．次の例を見られたい．

13. a. 'On the morning after my arrival our host showed us all over the place. The house itself was unremarkable, (...). (Idol)
    b. En la mañana que siguió a mi llegada, nuestro anfitrión nos mostró el lugar. La casa en sí no era nada extraordinaria.(...).

(13ab)の be 動詞文は話し手を招待したホストの家の特徴を述べたものであるが，この文とその前文の間にあるのは継起的関係ではなく同時的関係である．すなわち，ser の imp.に対応した当該 be 動詞文は，前文が提示した指示対象(the place)の一部分(the house)の「属性」を，あたかも当該の過去空間全体[18]を主題とする絵画の中に描かれた対象物の特徴のように記述しているだけなのである．そこには ser の ps.に対応した be 動詞文に見られたような，話し手と環境(指示対象)との直接的交渉(interaction)は存在しない．

ところで，上でも述べたように，be 動詞の simple past にはスペイン語のもうひとつのコピュラ動詞である estar の imp.に対応したものが少なくなかった．それらは例えば，以下のようなものである．

14. a. He had interrogated the young maid, Gladys Linch. She was terribly upset, very tearful and agitated, and he found it hard to get her to keep to the point, (...) (Tuesday)
    b. Interrogó a la doncella, Gladys Linch, que estaba llorosa y muy agitada, y que a cada momento eludía de la cuestión, (...)

15. a. No one was near the man when he was stricken down (...). (Idol)
    b. Nadie estaba cerca del hombre cuando cayó al suelo (...).

(14ab)は主語の「一時的状態」を示す estar の imp.に対応した例，(15ab)は主語の「所在」を示す estar の imp.に対応した例である．このようなスペイン語の estar の imp.に対応する be 動詞は，先に見たスペイン語の ser の imp.に対応した be 動詞の場合と同じく，前文に対して同時的関係にある

---

[18] (13ab)の be 動詞また ser の imp.にとって問題となる過去空間とは，前文の our host showed us all over the place/ nuestro anfitrión nos mostró el lugar.の部分が喚起する時空間である．

事態を表出するという特徴を持つ．例えば，(14ab)における was/estaba は，前文の示す Gladys というメイドに対する尋問が行われた際に，[she be terribly upset, very tearful and agitated/que estar llorosa y muy agitada]という事態が当該の出来事と同時に【存在】していたことを，また，(15ab)は，when/cuando 節中の[he be stricken down/(él) caer del suelo]という事態が生起した際に，[no one be near the man/nadie estar cerca del hombre]という事態が同時に【存在】していたことを表出しているのである．このような estar の imp.またそれに対応する be 動詞の simple past が示す特定の過去事態との同時性には，上で見た ser の imp.またそれに対応する be 動詞の場合と同じように，話し手と環境(指示対象)との直接的交渉(interaction)は含意されていない．これと同じことは以下に見る英語の there 構文の simple past およびそれに対応した hay あるいは estar の imp.についても言える[19].

16. a. There were <u>two</u> other people in the room, Dr Pender, the elderly clergyman of the parish, and Mr. Petherick, the solicitor, a dried-up little man with eyeglasses (...) (Tuesday)
    b. <u>Había</u> otras dos personas más en la habitación: el doctor Pender, anciano clérigo de la parroquia, y el señor Petherick, abogado, un hombre enjuto que usaba gafas (...)

スペイン語の imp.に対応した there 構文は，(16ab)に見られるように，その補語として具体的な物や人を示す普通名詞句を取ることが多い[20]．この事実はこれまで見てきたスペイン語の imp.に対応した be 動詞文が意味するところとうまく合致するように思われる．すなわち，当該の be 動詞文が話し手の知覚・認識の成立とは関係なく，単に特定の過去空間に存在する指示対象の「属性」や，特定の過去時において生起した事態と同時に【存在】していた状況を表出するものだとするならば，同じ be 動詞を含む there 構文もその補語として「出来事」性のより希薄な名詞的性質の顕著な名詞句，すなわち，具体的な物や人に言及する名詞句を従えると考えられるからである．とはいえ，時には次の例のように，「出来事」を示す抽象名詞句を取る there 構文も出現する．

17. a. We all followed him. As we entered the grove of trees a curious oppression came over me. I think it was the silence. No birds seemed to nest in these trees. There <u>was</u> a feeling about it of desolation and horror. (Idol)
    b. Todos le seguimos. Al entraren el bosquecillo me sentí invadido por una curiosa opresión. Creo que fue el silencio, ningún pájaro parecía anidar en aquellos árboles. <u>Se podía palpar</u> la desolación y el horror en el aire.

(17a)の there 構文には a feeling という「出来事」を喚起させる抽象名詞句が出現しており，それに呼応するように，対するスペイン語文(17b)では se podía palpar という一般動詞の imp.が出現している．しかし，ここで重要なのは，there 構文中にこのような「出来事」を示唆する名詞句が出現しても，それがスペイン語の imp.に対応している限り，当該事態は問題となっている過去空間の状況と

---

19 スペイン語の imp.に対応した英語の there 構文の中には，スペイン語の estar 文に対応したものもあった．これは「特定の人の存在の有無は hay ではなく estar で示す」というスペイン語の存在文の制約に因るものである．

20 スペイン語の imp.に対応した英語の there 構文 12 例のうち普通名詞（あるいは普通名詞相当のもの）を従えたものは 10 例（people, a pretty young girl, Richar Haydon, a young Dr. Symonds, a densely planted grove of trees, an evil influence, something, sign, one clue, a cottage）だった．残る 2 例は a feeling や a dozen soft sounds のように「出来事」を喚起する名詞句を従えており，それぞれ次のようなスペイン語の一般動詞句に対応していた．There <u>was</u> a feeling about it of desolation and horror./Se <u>podía</u> palpar la desolación y el horror en el aire. (Idol) There <u>were</u> a dozen soft sounds all round us, (...)/ [a] nuestro alrededor, se <u>oían</u> multitud de ruidos, susurros y suspiros. (Idol)

してしか解釈されないという点である．言い換えるならば，スペイン語の imp.に対応する there 構文では，スペイン語の ps.に対応した there 構文のように，事態の「出現」が表出されることはないのである．最後に，このようなスペイン語の一般動詞の imp.に対応した be 動詞の simple past を見ておこう．以下を参照されたい．

18. a. Her picture was very often in the Society papers and she was one of the notorious beauties of the Season. (Idol)
    b. Su fotografía aparecía a menudo en las revistas de sociedad y era una de las bellezas destacadas del momento.

19. a. On another hill was a barrow which had recently been excavated, and in which certain bronze implements had been found. (Idol).
    b. En otra colina se veía un túmulo recientemente excavado en el que habían sido encontrados diversos objetos de bronce.

20. a.The garage was up a side street. The big doors were closed, but by going up a little alley at the side we found a small door that led into it, and the door was open. (Ingots)
    b. El garaje se hallaba en una calle lateral. Sus grandes puertas estaban cerradas, pero al subir por la callejuela lateral encontramos una pequeña puerta que daba acceso al interior y que estaba abierta.

(18ab)では was と aparecer(現れる)の imp.，(19ab)では was と verse(見える)の imp.，そして(20ab)では was と hallarse(...にある/いる)の imp.が対応している．このうち(19)(20)は there 構文とは異なってはいるがある種の存在文と考えられる．これらの英語の be 動詞文に対するスペイン語文が一般動詞あるいは再帰動詞を用いた表現になったのは英語とスペイン語の語彙概念構造の違いに因るものと思われるが，ここで注目すべきは，たとえ be 動詞に対応するスペイン語の動詞が非状態的タイプのものであっても，それが imp.で表出されている限りその非状態性が際立つことはないという点である．ここで言う「非状態性の抑制」とは，すなわち，「出来事性の抑制」のことであり，その結果，当該の動詞が示す事態は，問題となる過去空間に存在している指示対象の「属性」あるいはその過去空間自体の状況として解釈されることになる[21]．

以上，スペイン語の imp.に対応した英語の be 動詞文を見てきた．その結果，当該の英語コピュラ文は，問題となる過去空間に存在する指示対象の「属性」やその過去空間自体の「状況」を示すことが分かった．換言すれば，スペイン語の imp.に対応する be 動詞文は単に当該過去空間における【当該事態の存在】を表出するに過ぎないということである．この be 動詞文の特徴は，当該事態の出現・成立とは直接の関係を持たないという意味において，これまで主張されてきた「英語の状態事態は，その開始点にも終結点にも言及しない imperfective なもの」とする見方に沿ったものと言える．

3.3.2. スペイン語の ser コピュラ文に対応する英語の過去形

さて，次に，過去の単純形式において imperfective/perfective の違いを形態的に標示するスペイン語のコピュラ文が英語のどのような過去形式に対応するかを見ていく．具体的には，3.1.，3.2.で触れたように，Arturo Pérez-Reverte の *La piel del tambor* のオリジナル版とその英語訳版を用い，スペ

---

[21] 逆に，(18)(19)(20)の be 動詞の simple past が対応するスペイン語の動詞の ps.によって表出されることになると，当該 be 動詞が示す事態は指示対象の「属性」ではなくなる．なぜなら，それは 3.3.1.2.で見たように，話し手による当該事態の知覚・認識の成立という「出来事」を表すことになるからである．

イン語の ser コピュラ文の ps.および imp.による表出とそれに対応する英語の表現をすべて抽出し，整理していった．その結果は，それぞれ以下のようになる．

表 3. スペイン語 ser の ps.あるいは imp.と英語の表現の対応関係

	ser の ps.	ser の imp.
was/were	54	446
be 動詞の他の時制	9	10
その他	27	33
対応形なし	40	246
合計	130	735

表 3 によれば，スペイン語を英語に翻訳する場合には，その対応形がないことが多いのが分かる．今，そのような英語に対応形がない場合を除き，新たにスペイン語の ser コピュラ文の ps./imp.とそれに対応する英語の表現をまとめてみると表 4 のようになる．

表 4. スペイン語 ser の ps.あるいは imp.に対応する英語の表現

	ser の ps.	ser の imp.
was/were	54(60%)	446(91.2%)
be 動詞の他の時制	9(10%)	10(2.1%)
その他	27(30%)	33(6.7%)
合計	90	489

表 4 からは次のことが分かる．まず，スペイン語の ser の ps.による表出はそのまま英語の be 動詞の simple past に対応することもあるが，それ以外の形式に対応することも少なくない．つまり，それは be 動詞の simple past 以外の時制形式に対応したり(9 例)，be 動詞以外の動詞の simple past あるいはそれ以外の時制形式に対応するのである(27 例)．前者の ser の ps.が be 動詞の simple past 以外の時制形式に対応する場合の内訳は，had been という過去完了が 6 例，現在完了，現在形，must have been がそれぞれ 1 例であった．このうちスペイン語の ps.と英語の過去完了との対応関係については be 動詞に特有のものではなく，他の動詞においても確認される一般的現象である[22]．また，ser の ps.に対応した be 動詞以外の動詞については，後述するように，「非状態」タイプのものが多かった．これら be 動詞以外の動詞も simple past だけでなく過去完了の形式を取っていた．一方，スペイン語の ser の imp.による表出とその英語における対応形からは，次のことが分かる．第一に，上の表の 91.2%という数字からすると，スペイン語の ser の imp.はほぼそのまま英語の be 動詞の simple past に置き換え可能と言える．しかし，そのような特徴を見せながらも，スペイン語の ser の imp.は be 動詞の simple past 以外の時制に対応することもある(10 例)．今回の調査では，スペイン語の ser の imp.のうち，be 動詞の過去完了に対応したものは 4 例，would be に対応したものは 3 例，そして would have been, must have been, 現在形に対応したものが 1 例ずつあった．また，スペイン語の ser の imp.の中にも be 動詞以外の動詞に対応するものがあり，その時制も simple past の他に過去完了があった(33 例)．以下では，ここで概観したスペイン語の ser の ps.あるいは imp.に対応した英語の表現を具体的に見ていく．

[22] Cf. 山村(2006), p.51.

3.3.2.1. ps. によって表出された ser コピュラ文に対応する英語の過去形

まず，ps.によって表出された ser コピュラ文に対応する英語の過去形式から見ていく．そのうち英語の be 動詞の simple past に対応したものの代表例は，以下のとおりである．

21. a. ---(...) Ahora puede empezar, padre Quart. Es todo suyo. Y Quart empezó. Fue duro, brutal a veces, pasando factura. p.123
    b. "You may now begin, Father Quart. He's all yours." So Quart began. He was harsh, brutal at times. p.86

22. a. El oficio religioso inaugural fue de difuntos, al día siguiente, por el alma del rey. p.65
    b. Next day, the first mass celebrated here was a requiem for the king. p.41

23. a. Esta vez la risa fue desagradable, entre dientes. p.145
    b. Her laugh this time was unpleasant. p.103

(21)は，相手に促されて始まった Quart の尋問が duro/harsh, bruto/brutal だったことを示したものであるが，これは先に見た(3.3.1.2.参照)スペイン語の ps.によって表出された英語コピュラ文と同じく，話し手の自分を取り巻く環境において生起した事態の直接的知覚・認識を示したものと言える．(22)は，al día siguiente/next day という時の副詞句と共に，当該事態[el oficio religioso inaugural es de difuntos por el alma del rey/the first mass celebrated be a requiem for the king]がその副詞句が示す時点において成立したことを示したものである．さらに，(23)は，(21)と同じく，話し手を取り巻く環境において生起した事態(la risa/her laugh)が話し手によって desagradable/unpleasant なものと知覚・認識されたと同時に，(22)と同じく，その話し手の知覚・認識が esta vez/this time が示す時点において生起したことを示したものである．このような ser の ps.に当該事態の発話時における「無効」を示す語句を付加すると，次の例が示すように，奇妙に感じられる．

21'. a. ---(...) Ahora puede empezar, padre Quart. Es todo suyo. Y Quart empezó. Fue duro, brutal a veces, pasando factura, pero ??ahora no lo es.
    b. "You may now begin, Father Quart. He's all yours." So Quart began. He was harsh, brutal at times, but ?? now he is not so.

このことは，(21)(22)(23)に出現した ser の ps.がある過去の時点において当該事態が成立したこと，そのことのみを示しているからだと思われる．このような ser の ps.による表出の否定は，逆に，当該事態が成立しなかったことを表すことになる．以下を参照されたい．

24. a. ---(...) Pero reconozco que en lo de la iglesia no se está comportando como un caballero. Macarena Bruner encogió los hombros. ---Pencho nunca lo fue. ---había cogido un terrón del azucarero y lo chupaba, distraída. p.276
    b. " I admit that in this business over the church he's not behaving like a gentleman." Macarena shrugged. "Pencho was never a gentleman," she said. She took a lump of sugar and sucked it thoghtfully. p.201

(24)では，ser の ps.と否定の副詞 nunca/never が共起することにより，当該事態[Pencho serlo/Pencho be a gentleman]が過去に成立しなかったことが示されているのである．

ところで，ser の ps.による表出には，次の例が示すように，当該事態の時間的限定性を示すものも

ある.

25. a. ···(...) Fue párroco rural durante media vida, en un pueblecito perido de los Pirineos. p.222
b. " For most of his life he was the parish priest in a tiny village up in the Pyrenees. " p.159

26. a. Durante un rato, la vieja beata del velo fue la única compañía de Quart. p.241
b. For a time, the old woman in the veil was the only other person there. p.174

(25)(26)に出現した ser の ps.による表出およびそれに対応した英語のコピュラ文は, durante media vida/for most of his life, durante un rato/for a time という時の副詞句と共起することにより, 当該事態が時間的に限定されたものであることを示す. このようにその有効期間が限定された ser/be 動詞のコピュラ文は, 上で見た Comrie, Vlach, Smith の言う perfective アスペクトを有するものと考えられる.

次に, スペイン語の ser の ps.が英語の be 動詞の simple past 以外の表出に対応している場合を見てみよう. そのような例としては, 次のようなものがある.

27. a. A tales alturas conocía lo bastante la historia familiar de Macarena Bruner para saber que Rafael Cuardiola Fernández-Garvey fue el hombre más atractivo de Sevilla. p.271
b. He found auto enough about Macarena's familiy history to know that in his day Rafael Guardiola Fernández-Garvey had been the most handsome man in Seville. p.197

28. a. ···(...) Siempre fui una mujer curiosa, incapaz de pasar ante dos líneas impresas sin detenerme a leerlas (...) p.516
b. " (...) I've always been very curious; if I see a line of print, I just have to start reading..." p.368

29. a. ···(...) ¿ Hizo bien o fue una estúpida cuando, con dieciocho años, renunció al amor terrenal (...) ? p.375
b. " (...) Is it wise, or is it stupid and irresponsible, at eighteen, to renounce worldly love, (...) ? p.272

(27)は ser の ps.が英語の be 動詞の過去完了に対応したものであるが, この例からスペイン語の ps.と英語の過去完了が時制的に等価値であると即断すべきではない[23]. 山村(2006)でも指摘したように, スペイン語の ps.と英語の過去完了の対応関係を考える際には, スペイン語の ps.がスペイン語の時制体系全体において示す機能, また, 英語の過去完了が英語の時制体系全体において示す機能に注目する必要があるからである. 換言するならば, 同じ言語外現実であっても, それをどのような時制形式によって表出するかは, 当該言語の時制体系のあり方に拠るのである. 同様のことは(27)(28)についても当てはまる. ただ, (28)に出現した ser の ps.には注意しておきたい. というのも, この fui は英語の I've been に対応していることからも明らかなように, 当該事態[(yo) ser una mujer curiosa]が siempre/always の副詞が示す頻度で成立したことを示しているのであり, それが発話時において無効であることを示しているわけではないからである. つまり, この例は, 先に見た García Fernández(1998)のように, スペイン語の ps.は当該事態の始点から終点まで示す perfectivo アスペク

---

23 スペイン語の ser の ps.に対応した英語の be 動詞の simple past 以外の時制形式の内訳は次のとおり. 過去完了形 6 例, 現在完了形 1 例, 現在形 1 例, must have been 1 例.

トを有すと考える説にとっては都合の悪いものなのである[24].

最後に，スペイン語の ser の ps.が英語のコピュラ動詞以外の simple past あるいはそれ以外の時制に対応した例を見ておく.

30. a. …(...) Algunos encuentros fueron un poco subidos de tono, e incluso el padre Óscar llegó a amenazar a mi secretario. p. 115.
b. " (...) and some of their discussions became rather heated. Father Oscar even threatened my secretary. p.79

31. a. El mundo es un pañuelo, pero después de esa noche Celestino Peregil habría de preguntarse muchas veces si el encuentro de su jefe Pencho Gaviera con la duquesa joven y el cura de Roma fue casual, (...). p.313
b. It's a small world, but after that night Celestino Peregil often wondered if the encounter between his boss and the young duchess and the priest from Rome happened by chance. (...) p.228
32. a. (...), el asistente de Pencho Gavira había caído en la tentación de utilizar los dos millones novecientas mil restantes para enderezar su crítica situación financiera. Fue una corazonada;(...) . p.177
b. (...), Pencho Gavira's assistant gave in to temptation: he used the remaining two million nine hundred thousand to try to repair hisdire financial situation. The idea had come to him in a flash, (...) p.128

(30)(31)(32)におけるスペイン語の ser の ps.は，became, happened, had come to という「状態事態」とは対極にある achievement タイプの英語の動詞の simple past/過去完了に対応しているという点で注目すべきものである．しかし，これまでの議論から分かるように，スペイン語の ser の ps.が話し手による当該事態の知覚・認識の成立を表出するということを考えるならば，このようなスペイン語と英語の対応は驚くに値しない．なぜなら，話し手がある時点である事態を知覚・認識するためには，その時点での当該事態の【成立・出現】が不可欠だからである．すなわち，ここで確認されたスペイン語のコピュラ動詞 ser の ps.と英語の become, happen, come to といった英語動詞の simple past/過去完了との対応は，当該事態の「成立・出現の表出」という共通の意味機能を介して可能になったものと考えられるのである[25].

以上，スペイン語のコピュラ動詞 ser の ps.に対応した英語の過去形を見た．次に，同じく ser の imp.に対応した英語の過去形を見ていく.

3.3.2.2. imp.によって表出された ser コピュラ文に対応する英語の過去形

ser の ps.に対応した英語の過去形を見たときと同じく，まず，imp.によって表出された ser コピュ

---

[24] 換言するならば，(27a)は次のように，発話時における当該事態の「無効」を示す語句を接続することが難しいということである．Siempre fui una mujer curiosa, incapaz de pasar ante dos líneas impresas sin detenerme a leerlas, ??pero ahora no lo soy.

[25]実際，スペイン語の ser の ps.で英語の be 動詞以外の動詞に対応した例を見ると，次に見るように，achievement タイプとは言わないまでも，「非状態」的なものが多かった．スペイン語 ser の ps.に対応した全 27 例の英語動詞の内訳：happened 3 例，did 3 例，became 2 例，had come/could have come 2 例，took 2 例，had served 1 例，had a glimpse 1 例，caught a glimpse 1 例，answered 1 例，asked 1 例，had 1 例，liked 1 例，had cost 1 例，vowed 1 例，went to 1 例，didn't recognize 1 例，passed 1 例，gave 1 例，remained 1 例，went smoothly 1 例.

ラ文に対応する英語の過去形式から見ていく．以下を参照されたい．

33. a. Abrochándose la sotana, el padre Ignacio Arregui, otro jesuita, salió al pasillo para recorrer los cincuenta metros hasta la sala de ordenadores. Era huesudo y flaco, (...). p.13
    b. Father Ignacio Arregui, also a Jesuit, came out into the hallway buttoning his cassock and walked the fifty meters to the computer room. He was thin and bony, (...) p.1

34. a. Inquieto, el padre Arregui tamborileó con las uñas sobre uno de los manuales técnicos que cubrían la mesa. INMAVAT era una lista reservadade altos cargos de la Curia vaticana. p.16
    b. Father Arregui durmmed his fingers anxiously on one of th computer manuals littering the table. INMAVAT was a confidential list of the high-ranking members of the Roman Curia. p.3

3.3.2.でも見たように，スペイン語の ser の imp.はその約 9 割が英語の be 動詞の simple past に対応していた．その意味において，スペイン語の ser の imp.と英語の be 動詞の simple past は類似性があると言える．この英語の be 動詞の simple past に対応するスペイン語 ser の imp.が意味するところを見ると，上の(33)(34)のように，当該文の指示対象である主語の「属性」であることが多い．ここで言う「属性」とは，先の 3.3.1.3.でも述べたように，指示対象に対する話し手の個人的認識・評価ではなく，あくまで「世間知」に基づいて話し手がその対象に付与したレッテルのことである．換言すれば，スペイン語の ser の imp.，また，それに対応する英語の be 動詞の simple past は，問題となる過去空間に当該事態の示す「属性」を持った指示対象あるいは状況が【存在】すること，そのことのみを示しているのである．

ところで，スペイン語の ser の imp.は，数は少ないものの，be 動詞の simple past 以外の時制に対応することもある[26]．次の例を見られたい．

35. a. El arzobispo tenía un cita cerca de la casa de Quart, en Cavalleggeri e Hijos. Cavalleggeri era, desde hacía un par de siglos, el sastre que vestía a toda la aristocracia de la Curia. p.33
    b. The archibishop had an appointment with Cavalleggeri and Sons, near where Quart lived. For a couple of centuries the Cavalleggeri had been sailors to the entire upper echolons of the Curia, (...) p.16

36. a. Honradó el extremo con una navajita que llevaba en la cadena del reloj. La navajita era un detalle---solía contar---de sus amigos Rita y Orson, en memoria de aquella tarde inolvidable (...) p. 150
    b. He cut one end with the pen-knife hanging on his watch chain. The little knife had been a present, he claimed, from his friends Rita y Orson, a momento of an unforgettable afternoon (...) p.107

(35)(36)が示すように，ser の imp.には，ps.の場合と同じく，英語の be 動詞の過去完了に対応するものがある．しかしながら，この事実から ser の imp.と be 動詞の過去完了が同じ機能を持つと判

---

26 スペイン語の ser の imp.のうち，英語 be 動詞の simple past 以外の時制に対応したものは全部で 10 例あった．その内訳は次のとおりである．過去完了 5 例，would be 3 例，would have been 1 例，must have been 1 例．

断すべきでないのは，先に見た ser の ps.と be 動詞の過去完了の場合と同様である．とは言え，スペイン語の ps.と imp.の機能的違いを時間的限界性の有無に基づくアスペクトの違いとする見方，また同じく，英語の be 動詞の simple past を imperfective アスペクト，一方，その過去完了形を perfective アスペクトとする見方にとっては，この ser の ps./imp.と英語 be 動詞の過去完了の対応は看過できないものであろう．現在，本稿はこの点についての具体的な見解は持ちあわせないが，次のことは指摘できると思っている．つまり，英語の過去完了には，現在完了がそのまま既定の過去空間にシフトした結果出現したと解釈される場合と，simple past が過去空間にシフトした結果出現したと解釈される場合の２種類があり，それがスペイン語の ser の imp./ps.との対応に何らかの形で関係しているということである．例えば，(35)のスペイン語 ser の imp.である era は，その解釈から，英語の「継続」の意味を表す現在完了が過去にシフトした結果生じた過去完了に対応したものと判断されるが，このように「継続」という意味の英語の完了形に対応することができるのは，スペイン語の ps.と imp.のうち imp.だけである．他方，英語の be 動詞の simple past が過去にシフトした結果出現した過去完了については，スペイン語の ps.と imp.のどちらもが対応することができるため，その区別についてはっきりしたことを言うのは難しい．ただ，これまでの議論からすれば，スペイン語の ps.に対応する英語の過去完了は当該の過去における任意の事態の【成立・出現】を表出するのに対し，スペイン語の imp.に対応するそれは問題となる過去空間における当該事態の【存在】を表出することになると推察される．

スペイン語の ser の imp.の中にも，英語のコピュラ動詞以外の simple past あるいはそれ以外の時制に対応した例がある．次の例を参照されたい．

37. a. A pesar de su poder, el director del IOE conocía perfectamente los límites, y su mirada <u>era una advertencia</u> al subordinado: ambos se movían en aguas peligrosas. p.27
    b. Despite his power, the director of the IEA knew he could go so far, and his look <u>contained a warning</u> to his subordinate—that they werew both swimming in dangerous waters. p.11

38. a. ···Realizada por Juan Martínez Montañéz casi un siglo antes que el retablo... <u>Era propiedad de</u> los duques del Nuevo Extremo; (...) p.67
    b. "Sculpted by Juan Martínez Montañéz almost a century before the altarpiece... It <u>belonged to</u> the dukes of El Nuevo Extremo. (...) p.42

39. a. Para don Ibrahim, la vida <u>era inconcebible</u> sin un cigarro cubano que llevarse a la boca. p.150
    b. Don Ibrahim <u>couldn't imagin</u> life without a Cuban cigar. p.107

40. a. Corrían rumores sobre las presiones especulativas del ayuntamiento y los bancos, y los jefes del subcomisario <u>eran partidarios de</u> mantenerse al margen. p.159
    b. There were rumors that the council and the banks were bringing pressure to bear, and the deputy superintendent's bosses <u>wanted to</u> keep well out of it. p.114

41. a. En su mundo, en el campo de batalla de mueres o matas por el que caminaba en busca de fortuna, <u>era necesario</u> el mismo movimiento continuo de esa polita puñetera. p.188
    b. In his world he <u>had to</u> keep moving, like that goddamn ball. p.135

42. a.No <u>era necesario</u> que la destrucción fuese total, había precisado Peregil al darles instrucciones para agilizar el tema. p.265

b. They didn't need to destroy the church totally, Peregil said when he gave them their instructions. p.192

43. a. La vieja duquesa, acababan de oírle decir, no soportaba las latas. El sabor era distinto, metálico. p.270
b. The old duchess remarked that she hated drinking cola from a can. It tasted different, metalic that way. p.196

44. a. En su boca, aquello resultaba una paradoja; y el propio Quart era muy consciente de eso. p.291
b. Coming from Quart, these were strange words, and Quart knew it. p.212

スペイン語の ser の imp.に対応した英語の be 動詞以外の simple past については，次のようなことが分かる．まず，(37)(38)(40)(43)(44)のように，be 動詞ではないが，Vendler の基準によれば state に分類される事態が少なくない．また，(39)(41)(42)のように，助動詞との組み合わせになった事態も多い．さらに，先に見たスペイン語 ser の imp.の機能的特徴に対応するごとく，どの英語の対応形も当該事態の【成立・出現】を示すのではなく，既定の過去空間における当該事態の【存在】を示していると解釈される．例えば，(43b)は，前文の主語である duquesa/duchess が常々缶入りコーラの味に対して持っている感想を示したもので，ある特定の時点においてそのような事態が生起したことを表したものではないのである．このような ser の imp.に対応した be 動詞以外の simple past が示す特徴は，ser の ps.に対応した be 動詞以外の simple past が示した特徴とは対立するものである．

最後に，スペイン語の ser の imp.が achievement 類である become の過去完了に対応した例をあげておく．

45. a. …(...)A tales alturas, su historia y la del capitán Xaloc eran leyendas. p.329
b. " By then, the story of Carlota and Captain Xaloc had become a legend. p.240

(45a)の ser の imp.は a tales alturas が示す時点において，[su historia y la del capitán Xaloc ser leyendas]という事態が【存在】していたことを示す．このとき重要なのは，a tales alturas は当該事態の【成立】時点を示しているわけではないという点である．言い換えるならば，(45a)の時の副詞句 a tales alturas は当該事態が【存在】する時空間を表すだけであり，その【成立】時点自体は a tales alturas 以前のどこかと言うしかないのである．一方，(45b)の had become は，by then が示す時点より前のどこかで[the story of Carlota and Captain Xaloc become a legend]が示す事態が【成立】したことを表す．つまり，スペイン語の ser の imp.は当該事態の【成立】を含意とし，その後の結果状態に焦点をあて，それが a tales alturas の示す時点において【存在】していたことを表出するのに対し，英語の過去完了は by then の示す時点より前に当該事態が【成立】したことを表出し，その後の結果状態はあくまで含意としているのである．これは結局，(45)のスペイン語と英語の表現の違いが同じ事態のどこに焦点をあてるのか—【成立】か，あるいは，その結果である【存在（結果状態）】か—にあることを示したものである．

4. 考察

本節では，前節で見た観察結果を基に，英語の simple past によって表出されたコピュラ文の解釈とスペイン語の ps.あるいは imp.で表出された ser コピュラ文の解釈を検討する．そして，最後に，これら二言語におけるコピュラ文の過去の表現形式からコピュラ文の時間構造の再考，とりわけ，それと話し手との認知のあり方の関係を考察する．

4.1. 英語のsimple pastによって表出されたコピュラ文の解釈

まず，英語のbe動詞文から見る．3.3.1.の結果からすると，英語のbe動詞文のsimple pastによる表出は，スペイン語のps.による表出およびimp.による表出のどちらにも対応することが分かった．少なくとも，通説の言うように，スペイン語のps.とimp.の違いがperfectiveとimperfectiveといったアスペクトの機能的差異に基づくものとするならば，このことは，従来の「英語の状態事態はimperfectiveである」とする説に対する反例になると思われる．ただし，この反例の取り扱いについては注意が必要である．というのも，perfectiveアスペクトを有すとされるps.によって表出されたスペイン語文に対応したbe動詞の解釈にはいささか問題があるからである．

2.1.で見たように，Smith(1991)は，simple pastによって表出された英語の状態事態は文脈によりimperfectiveにもperfectiveにもなるとした上で，perfectiveに解釈される際には，当該事態の終結点(endpoint)が標示されると述べていた．しかし，このSmithの解釈には，本稿の観察結果とは相容れない部分がある．それは，次のような場合である．

46(=3). a. Suddenly Diana began to laugh hysterically. It <u>was</u> a strange horrible sound breaking the silence of the glade. (Idol)
b. De pronto, Diana comenzó a reírse histéricamente. <u>Fue</u> un sonido extraño y horrible que rompió el silencio del claro.

47(=5). a. I had slept well enough that first night, but the next night my sleep <u>was troubled</u> and broken. (Ingots)
b. La primera noche había dormido bastante bien, pero la siguiente mi sueño <u>fue</u> intranquilo y entrecortado.

48(=8). a. 'It was a very dreadful night, none of us could sleep, or attempt to do so. The police, when they arrived, <u>were frankly incredulous</u> of the whole thing. (Idol)
b. Fue una noche horrible, nadie pudo conciliar el sueño, ni intentarlo siquiera. La policía, cuando llegó, <u>se mostró del todo incrédula</u> ante lo ocurrido.

(46)(47)(48)に出現したbe動詞のsimple pastはすべてスペイン語のps.に対応したものであるが，当該文が意味するのは当該事態の終結ではなくその【成立】自体であった．つまり，perfectiveであるスペイン語のps.に対応するbe動詞のsimple pastは，Smithが主張するように，必ずしも当該事態の終結点(endpoint)を標示するわけではないのである．もちろん，今回観察した例の中には，以下のようにSmithの主張に合致するものもあったが，それらが示す当該事態の終結は，be動詞のsimple pastによって表出されたというよりはむしろ共起した副詞句によって示されているといった方がよい．

49(=7). a. There <u>was</u> a few moments silence and then Raymond said: (Tuesday)
b. <u>Hubo</u> unos instantes de silencio y luego Raymond dijo.

50(=25). a. ···<u>Fue</u> párroco rural durante media vida, en un pueblecito perido de los Pirineos. p.222
b. " For most of his life he <u>was</u> the parish priest in a tiny village up in the Pyrenees. " p.159

したがって，スペイン語のps.に対応した英語のbe動詞のsimple pastによる表出については，当該事態の【成立】そのものに言及することができるという点を確認しておく必要がある．

一方，スペイン語のimp.に対応した英語のbe動詞のsimple pastについては，これまでの主張と

矛盾するところはないと考える．すなわち，それは従来主張されてきたように，当該事態が既定の過去時において開始点も終結点も欠いた open なものであることを示しているのである．しかし，ここでもその解釈には注意を要する点がある．

51(=10). a. Yet once, when I was a young man, I had one very strange and tragic experience. (Idol)
b. No obstante, en cierta ocasión, cuando era joven, tuve una extraña trágica experiencia.

(51)の命題[I be a young man/(yo) ser joven]の真偽は時間的に限定されるものである．なぜなら，人が young man/joven でいる期間は世間知的に決まっているからである．しかしながら，(51a)に対応するスペイン語文では ser の imp.しか出現しないことが知られている[27]．すなわち，上記の「開始点も終結点も欠いた open な事態」が意味するのは決して言語外現実の真偽に基づくものではないのである．それでは，この「開始点も終結点も欠いた open な事態」が真に意味するところは何なのだろうか．本稿はこれまで述べてきたように，それは既定の過去時あるいは過去空間における指示対象の【属性】であると考える．例えば，(51)の "I was a young man/(yo) era joven"は，主節の事態が成立した時点において，指示対象である I/(yo)が young man/ joven という【属性】を有していた，換言すれば，その時点において[I be young man/(yo) ser joven]という事態が【存在】していたことを示す，ということである[28]．同様のことは次の例についても言える．

52(=13). a. 'On the morning after my arrival our host showed us all over the place. The house itself was unremarkable, (...). (Idol)
b. En la mañana que siguió a mi llegada, nuestro anfitrión nos mostró el lugar. La casa en sí no era nada extraordinaria.(...).

(52)では，当該文の前文が示す過去の時点(空間)が既定の過去空間と認識され，その時空間における指示対象 the house/la casa の【属性】として，[be unremarkable/no ser nada extraordinaria]が【存在】していたと解釈されることになる．

4. 2. スペイン語の ps. あるいは imp. によって表出された ser コピュラ文の解釈

次に，スペイン語の ser 文が ps.あるいは imp.によって表出された場合の解釈を対応する英語の過去形式のあり方から考察してみる．

4. 2. 1. スペイン語の ps. によって表出された ser コピュラ文の解釈

ps.によって表出された ser 文についてまず指摘しておかねばならないのは，以下の例が示すように，それが当該事態の【成立】を示すという点である．

53(=21). a. …(...) Ahora puede empezar, padre Quart. Es todo suyo. Y Quart empezó. Fue duro brutal a veces, pasando factura. p.123
b. "You may now begin, Father Quart. He's all yours." So Quart began. He was harsh, brutal at times. p.86

54(=22). a. El oficio religioso inaugural fue de difuntos, al día siguiente, por el alma del rey. p.65
b. Next day, the first mass celebrated here was a requiem for the king. p.41

---

[27] Cf. 山村(1997a, 2002).
[28] これは，結局，when/cuando 節自体が主節の事態の成立時を示すというのに等しい．

3.3.2.1.でも述べたように，(53)は前文の示す事態に対する話し手の【知覚・認識の成立】を示したものであり，(54)は当該事態が al día siguiente/next day の示す時点において【成立】したことを示していた．このように ser 文の ps.が当該事態の【成立】を示すという事実はこれまでにも指摘されることはあったが，それはあくまで ps.によって表出された ser 文の周辺的現象として扱われてきた感がある[29]．2.2.でも述べたように，従来，スペイン語の状態事態，とりわけ，ser 文の ps.による表出は当該事態の終結を示すのが一般的と考えられてきたからである．しかし，少なくとも本稿の観察によれば，ser 文の ps.が当該事態の終結を明確に示すのはその有効期間を示す副詞句が共起している場合だけであり，それ以外は当該事態が過去のある時点において【成立】したという解釈を拒むものではなかった．このような ps.によって表出された ser 文の特徴は，特に，次のような例によって確認することができる．

55(=30). a. …(...) Algunos encuentros <u>fueron</u> un poco subidos de tono, e incluso el padre Óscar llegó a amenazar a mi secretario. p. 115.

b. " (...) and some of their discussions <u>became</u> rather heated. Father Oscar even threatened my secretary. p.79

56(=31). a. El mundo es un pañuelo, pero después de esa noche Celestino Peregil habría de preguntarse
muchas veces si el encuentro de su jefe Pencho Gaviera con la duquesa joven y el cura de Roma <u>fue</u> casual, (...). p.313

b. It's a small world, but after that night Celestino Peregil often wondered if the encounter between his boss and the young duchess and the priest from Rome <u>happened</u> by chance. (...) p.228

(55)(56)は，ser の ps.がそれぞれ英語の became, happened といった「出来事性(非状態性)」の高い動詞の simple past に対応した例である．このような例は，一般に状態事態の代表ともいえる ser コピュラ文も ps.によって表出されると「出来事性(非状態性)」の高い事態に変わることを如実に示したものと考えられる[30]．

4.2.2. スペイン語の imp. によって表出された ser コピュラ文の解釈

imp.によって表出された ser コピュラ文について指摘すべきは，まず，それがある既定の過去時あるいは過去空間における当該事態の【存在】を示すという点である．imp.によって表出された ser コピュラ文が，ある過去における指示対象の「属性」を示すことが多いのもこのことに因ると考えられる．しかしながら，この既定の過去時あるいは過去空間における当該事態の【存在】ということと，これまで通説となってきた imp.が持つとされる imperfective アスペクトの意味するところが同じものかという点については慎重に扱う必要がある．次の例が示すように，ser コピュラ文の中には専ら imp.による表出しか認められない事態が存在するからである．

---

[29] Cf. Butt & Benjamin(2000), p207. しかし，先行研究の中にも，Guitart(1978)のように ser の ps.の ingressiveness な面を詳細に記述したものがあった点は特筆に値する．

[30] 問題は，このようなスペイン語の ps.の ser 文が見せる「出来事性(非状態性)」をどう捉えるかであるが，本稿は，今のところ，それは ps.という時制形式の機能から生じたものと考えている．しかし，本稿のような見方は，ps.は当該事態の終結(endpoint)を示すというアスペクト的観点からは支持されない．アスペクト的観点に立つ研究者は，状態事態が出来事的に解釈される場合，そこには事態タイプのシフト(あるいは事態の coercion)が起こっていると考えるのが一般的だからである．Cf. Smith(1992:254-258)

51(=10). a. Yet once, when I was a young man, I had one very strange and tragic experience. (Idol)
b. No obstante, en cierta ocasión, cuando era joven, tuve una extraña trágica experiencia.

57. a. Cuando llegamos a casa, ya era de noche. (作例) 我々が家に着いたときは，もう夜だった.
b. Eran las cuatro y todavía no había venido. (Porto Dapena 1989:87)
4時だったが，彼はまだ来ていなかった.

先にも見たように，(51)の[(yo) ser joven「私が若者であること」]という事態内容は時間的に限定されたものである．同様に，(56a)の示す[ya ser de noche「もう夜であること」]，(57b)の示す[ser las cuatro「4時であること」]もその内容は時間的に限定されたものである．したがって，これらの ser コピュラ文は時間軸におけるその終結点が明確と言えるが，例が示すように，その過去形式は imp. になるのが普通である[31]．このことは，スペイン語の imperfective アスペクトが必ずしも言語外現実における当該事態の終結・未終結に対応したものでないことを示すものであるが，ここで特に確認しておきたいのは，だからと言って，この ser を用いた若さ・幼少を表す表現，ser を用いた時刻の表現の imp.による表出が話し手の自由な選択によるものでもないという点である．つまり，これらの事態は明確な時間的限定を示すにも拘わらず，その過去形式による表出は体系的に imp.によって行われるのである．以上の言語事実は，imp.を時間軸上の open な事態を表出する形式と解釈するアスペクト派にとっては説明の難しいものと思われる．一方，時間軸上における当該事態の開始や終結に言及することのない本稿の見方によれば，これらの ser の imp.は次のように解釈されることになる．まず，[(yo) ser joven], [ya ser de noche], [ser las cuatro]の imp.による表出は，問題となっている過去時において当該事態が【存在】していることを示す．つまり，(50b)においては，「私が奇妙な悲劇的な経験をした時」に「私(yo)」という指示対象が「若者」であったという状態が【存在】していたこと，(56a)においては，「我々が家に着いた時」に「夜」という状況そのものが【存在】していたこと，また，(56b)にあっては，明示されてはいないが文脈から推察されるある既定の過去時そのものが「4時」という状況によって特徴づけられるものであったことが示されているのである．それでは，なぜこれらの事態は体系的に imp.によってしか表出されないのだろうか．この問いに答えるにあたっては，本稿は，逆に，なぜそれらの事態が ps.によって表出されないのかを考えることが肝要なのではないかと思う．

第3節の観察結果のところでも見たように，ser が ps.によって表出される際には，当該事態の新たな【成立】があった．そして，この当該事態の新たな【成立】とは，言い換えれば，話し手自身による当該事態の【認知・知覚】のことであった．本稿は，ser を用いた若さ・幼少の表現や時刻の表現が ps.によって表出されにくいのは，それらの意味内容がこういった ps.の意味機能と相容れないからだと考える．(51)について言えば，人間は生まれてから徐々に成長していくもので「幼少・若年期」というのは，いわばその初期状態である．つまり，通常，当該人物が「こども・若者」から「大人」へと変化する状態が【成立】することは考えられても，その逆，例えば，何もないゼロの状態からいきなり「こども・若者」の状態が【成立】したり，「大人」が「こども・若者」に変化することを想像することは難しい．このことが[(yo) ser joven]の ps.による表出を困難にしているのである[32]．他方，

---

31 [ser de noche], [ser las cuatro]といった時刻表現はまず imp.によって表出されると言われている．Cf. Porto Dapena(1989:86)．一方，[ser joven]については，[ser un joven]のように不定冠詞が付加されたり，[ser un joven muy bueno]のように形容詞句が付加されると ps.による表出が容易になる．この点については山村(1997a, 1998, 2002)を参照されたい．

32 しかしながら，次の例のように「こども・若者」を示す語に評価的な形容詞が付加された場合は，この限りではない．Fue un niño bueno. 彼はいい子だった．この例が ps.によって表出されたのは，ある過去において当該人物が話し手によって bueno「良い」と【認知・知覚】されたからである．また，形容詞の付加がなくても次のように ps.による表出が可能な場合もある．Yo también fui niño. 私もこどもだった．

serを用いた時刻表現がps.によって表出されにくいのは，それが話し手という個人の評価によって【成立】する事態ではないからだと考える．これは，換言すれば，[ser las cuatro]「4時であること」のような時刻表現というのは，その時々の状況を時計という一般常識によって共有された基準に従って規定していくことであり，そこに話し手個人の【認知・知覚】が入り込む余地はないということである．同様に，[ser de noche]「夜であること」も一般の常識，いわゆる世間知に照らし合わせて判断されるものと言える．このように，ser を用いた時刻表現というのは，一般常識や世間知が決めた一定の基準に従った当該時空間の「属性」表現であることから，話し手個人の（環境との相互作用から生まれた）【認知・知覚】の【成立】を表出するps.とは相容れないのだと考えられる．

4.3. コピュラ文の時間構造の再検討

以上，英語のsimple pastによって表出されたbe動詞コピュラ文とスペイン語のps.あるいはimp.によって表出されたserコピュラ文の振る舞いを考察してきた．本項では，これらの考察を踏まえ，状態事態の代表とも言えるコピュラ文の時間構造について再考してみたい．

第2節でも見たように，英語の先行研究の多くは状態事態をbe+ingと同じくimperfectiveを有するものと分析し，そのsimple pastによる表出は，当該事態を開始点も終結点も持たないopenなものとして提示すると解釈していた．しかしながら，本稿の観察によれば，この英語のbe動詞文は同じimperfectiveアスペクトを有すとされるスペイン語のimp.のみならず，それと対立するperfetiveアスペクトのスペイン語のps.にも対応していた．一方，スペイン語のserコピュラ文のps.による表出とimp.による表出を詳細に観察すると，通常当該事態の終結を示すとされるps.によって表出されたserコピュラ文の多くが，当該事態の終結ではなく当該事態の【成立】そのものを示していることが確認された．そして，上述のsimple pastによって表出されたbe動詞コピュラ文の中にも，このような当該事態の【成立】，いわゆる，話し手の【認知・知覚】の【成立】に言及するserコピュラ文のps.による表出に対応するものが少なくなかったのである．以上のことから，本稿は，いわゆるコピュラ文の時間構造の中に「開始点」相当の時点を設定してもいいのではないかと考える．ただし，このコピュラ文の「開始点」相当の時点というのは，次のように理解されなければならない．

まず，コピュラ文における「開始点」というのは，主語が示す指示対象が自ら動作・行動を起こし，その結果，当該事態が【成立】する時点を示しているわけではない．これまでの議論からも明らかなように，コピュラ文における事態の【成立】というのは，「話し手」が当該事態の言及内容を【認知・知覚】した結果【成立】するものであり，その「開始点」もそのような意味で解釈すべきものなのである．もちろん，コピュラ文の【成立】の中には，次のスペイン語文のように，話し手の【認知・知覚】の成立とは別に，主語となる指示対象自身の【変化】に基づくものもある．

58. Desde aquel día <u>fueron</u> (ser. ps) enemigos. (Guitart 1989:152)
あの日以来，彼らは敵だった（敵になった）．

59. En el 74 <u>fue</u> (ser. ps) lector de español en la Universidad de Burdeos. (山村 1997a:96)
74年に彼はボルドー大学のスペイン語の講師になった．

これらのことから，コピュラ文の「開始点」というのは，そのあり方は様々ではあるが，いちおう当該事態の未成立から成立への【変化】，すなわち，主語Xとその補語Yの間の等号関係が【成立】し

この例がps.によって表出されたのは副詞 también「…もまた」が共起しているからだと考えられる．すなわち，この副詞の存在によって，当該文は，指示対象においても[ser niño]「こどもであること」という事態が過去に【成立】しえたことが<u>新たに</u>確認されているのである．Cf. 山村 (2002).

た時点と理解することができるだろう．以上のことを図示すると次のようになる．X は主語，Y は補語を示し，~(X=Y)は主語と補語の間に等号関係が成立していないことを，また，(X=Y)は主語と補語の間に等号関係が成立していることを示す．

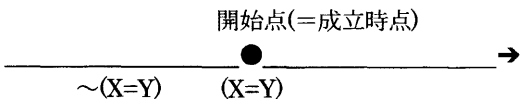

図１．コピュラ文の時間構造

このようにコピュラ文の時間構造にその「開始点(=成立時点)」を設定することはできるが，コピュラ文が示す事態の【成立】がどのように表出されるかについては，言語によって異なってくる．スペイン語の ser 文の場合，その【成立】は ps.によって表出されることになる．したがって，その【成立】を示す ser の ps.と共起した時の副詞句は「開始点＝(成立時点)」を示すと言ってよい．以下の例を参照されたい．副詞句は点線で示す．

60(=5b).La primera noche había dormido bastante bien, pero la siguiente mi sueño fue intranquilo y entrecortado.

61(=22a). El oficio religioso inaugural fue de difuntos, al día siguiente, por el alma del rey.

一方，英語の be 動詞文には，【成立】のための独自の形式がない．be 動詞の simple past は当該事態の【成立】と同時にその【存在】をも示すからである．これまで見てきた観察結果によれば，むしろその simple past は，当該事態の既定の過去時における【存在】を示すことの方が多いと言えるだろう．先行研究がコピュラ文を imperfective と解釈してきたのもそのような背景があったものと推察される．しかしながら，本稿の観察によって英語 be 動詞の simple past が【成立】を示すスペイン語 ser 文の ps.に対応することが確認されたからには，英語の be 動詞文の simple past も当該事態の【成立】を示すことは可能であると結論づけられよう．

次に，コピュラ文の「終結点」についてはどう考えるべきだろうか．本稿は，スペイン語の ser コピュラ文にせよ英語の be 動詞文にせよ，その過去形式による表出自体が当該文の「終結」を標示することはないと考える．つまり，コピュラ文の「終結」は，当該文に出現した期間を示す副詞句や語用論的に含意されたものと考えているのである．このように考えるならば，コピュラ文の時間構造に設定される終点(endpoint)は，結局，「開始点(=成立時点)」だけということになる．

最後に，これまで【存在】という語で示されてきたものとコピュラ文の時間構造の関係を確認しておきたい．これまで検討してきたコピュラ文の時間構造からすると，既定の過去時（空間）におけるコピュラ文の【存在】とは，当該事態が「開始点(=成立時点)」において【成立】した後，それが「終結」するまでの時間構造に対応するものと言える．図示するならば，次の網掛け部分に相当する．

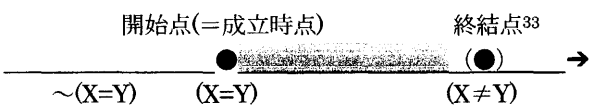

図２．既定の過去時におけるコピュラ文の【存在】

[33] コピュラ文の時間構造にとって「終結点」は固有のものではないので括弧に入れて示す．

コピュラ文の【存在】がどのように標示されるかも言語によって異なってくる．スペイン語の ser コピュラ文の場合，それは imp.によって表出されるが，英語の be 動詞文についてはそのための固有の形式がない．上でも述べたように，be 動詞の simple past は当該事態の【成立】も示すからである．

以上，コピュラ文の時間構造について再検討した．その結果，少なくとも本稿の観察結果に従う限り，コピュラ文の時間構造には，主語と補語の等号関係の【成立】時点という意味での「開始点(=成立時点)」を設定することができること，コピュラ文にとって「終結点」は本来的なものではなく時の副詞句や語用論的含意によって示されるものであることを主張した．

5. まとめ

以上，本稿はこれまで専ら imperfective と理解されてきた英語の状態事態，とりわけ be 動詞に代表されるコピュラ文の過去形式とスペイン語の ser コピュラ文の過去形式とを比較対照させることにより，以下のことを明らかにした．

- 従来，be+ing と同じく imperfective と解釈されてきた英語の be 動詞コピュラ文の simple past による表出は，一般に imperfective アスペクトを有すとされるスペイン語 ser コピュラ文の imp. による表出のみならず，perfective アスペクトを有すとされる同文の ps.による表出にも対応していた．このことから，英語の be 動詞コピュラ文も imperfective と perfective の両方の解釈が可能と考えられる．ただし，その対応頻度数だけを見ると，英語 be 動詞の simple past はスペイン語 ser の imp.に対応することが多い．
- スペイン語 ser コピュラ文の ps.による表出およびそれに対応する英語 be 動詞文の simple past による表出は，当該事態の【成立】そのものを示すことができる．
- スペイン語 ser コピュラ文の ps.による表出およびそれに対応する英語 be 動詞文が示す当該事態の【成立】とは，話し手自身による当該事態の【認知・知覚】の【成立】あるいは指示対象における当該事態の【変化】のことである．このことから，いわゆるコピュラ文の時間構造の中には，当該事態の【成立・変化】時点という意味での「開始点(=成立時点)」を設定することが可能だと思われる．
- スペイン語 ser コピュラ文の ps.による表出およびそれに対応する英語 be 動詞文は当該事態の「終結」を示すこともできる．しかし，この「終結」は当該の動詞形式によって示されるというよりはむしろ共起する副詞句あるいは語用論的含意によるものと考えられる．
- スペイン語 ser コピュラ文の imp.による表出およびそれに対応する英語 be 動詞文の simple past による表出は，既定の過去時（あるいは過去空間）における当該事態の【存在】を示す．この既定の過去時における当該事態の【存在】とは，問題となる過去時における指示対象あるいは指示状況の「属性」のことである．これまで英語の be 動詞文に付与されてきた imperfective アスペクトの特徴はこの既定の過去時における当該事態の【存在】に対応するものである．
- 英語の be 動詞の simple past による表出は，当該事態の【成立】と【存在】の両方を示すことができる．言い換えるならば，英語の be 動詞には当該事態の【成立】を表すための独自の形式，また，その【存在】を表すための独自の形式がないということである．
- スペイン語の ser コピュラ文の ps.による表出は，当該事態の【成立】を示し，その imp.による表出は，当該事態の【存在】を示す．つまり，スペイン語の ser コピュラ文では，ps.と imp.という表出形式の違いが【成立】と【存在】の違いを区別する．
- スペイン語 ser コピュラ文の ps.による表出が示す当該事態の【成立】とは，話し手による当該事態の【認知・知覚】の【成立】あるいは指示対象における当該事態の【変化】のことであるが，これ自体は「出来事性」が高いものと言える．そのため，スペイン語 ser コピュラ文の ps.による表出はしばしば英語の非状態事態に対応することがある．

参考文献：

But, J & C. Benjamin (2000³): *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, Arnold.

Comrie, B. (1976): *Aspect. An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*, Cambridge: Cambridge Press.

Dowty, D.R.(1986): " The Effects of Aspectual Class on the Temporal Structure in Discourse: Semantics or Pragmatics ? ", *Linguistics and Philosophy* 5, pp.23-55

García Fernández, L. (1998): *El aspecto gramatical en la conjugación*, Madrid:Arco/Libros.

Guitart, J.M. (1978): "Aspects of Spanish aspect: A new look at the preterit/imperfect distinction", in Suñer M. (ed.), *Contemporary Studies in Romance Linguistics*, pp. 132-168.

Parsons, T. (1989): " The Progressive in English: Events, States and Processes", *Linguistics and Philosophy* 12, pp.213-241.

Porto Dapena, J. A. (1989): *Tiempos y formas no personales del verbo*, Madrid: Arco/Libros, S.A.

Rojo, G. (1974): "La temporalidad verbal en español", *Verba* 1, pp.68-149.

----- (1976): "La correlación temporal", *Verba* 3, pp.65-89.

----- (1990): "Relaciones entre temporalidad y aspecto en el verbo español", en I. Bosque (ed.), *Tiempo y aspecto en español*, pp.17-43.

Rojo, G & A. Veiga (1999): " El tiempo vebal. Los tiempos simples", en I. Bosque y V. Demonte (dirs.), *Gramática descriptiva de la lengua española*, pp.2867-2934.

Smith, C.(1991): *The Parameter of Aspect*, Dordrecht:Kluwer Academic Publishers.

Vlach, F. (1991): "The Semantics of the Progressive" , in P. Tedeschi & A. Zaenen (eds.), *Syntax and Semantics 14: Tense and Aspect*, pp. 271-292.

Yamamura, H. (2000): " Unas dudas sobre la interpretación basada en la oposición aspectual del pretérito simple y el pretérito imperfecto", 『言語文化論究』No.12, pp.145-154.

-----(2001): "La función básica del pretérito imperfecto y la delimitación temporal ", *Estudios Hispánicos* 21 (Asociación Coreana de Hispanistas), pp.311-317.

----- (2003): "El adverbio *siempre* y las dos formas simples del pasado" *HISPANICA* 47, pp.74-89.

樋口万里子(2005)：「相・法・時制」『認知コミュニケーション論』, pp.55-99.

山村ひろみ(1996):「canté/canata のアスペクト対立に基づく解釈をめぐって」*HISPANICA* 40, pp.48-62

-----(1997a):「ser コピュラ文の pretérito による表出について」『独仏文学研究』47, pp.81-102.

-----(1997b):「canté 形, cantaba 形と時間的限定性」*HISPANICA* 41, pp.53-66.

-----(1998):「pretérito による表出のための条件－無生主語文の場合」『言語文化論究』No.9, pp.185-207.

-----(2002):「スペイン語の ser コピュラ文における pretérito perfecto simple による表出と pretérito imperfecto による表出」『テンスとアスペクト－日・英・仏・西語の観点から－』言文叢書Ⅷ, pp.1-45.

-----(2006):「アガサ・クリスティの推理短編小説における過去の表現－フランス語とスペイン語の対照の観点から－」『比較社会文化』第 12 巻, pp.39-56.

資料体：

Christie, A.(2002) : "Tuesday Night Club", *The Thirteen Problems*, pp.9-27, Harper Collins Publishers.

-----(2002):"The Idol House of Astarte",*The Thirteen Problems*, pp.29-51, Harper Collins Publishers.

-----(2002):"Ingots of Gold", *The Thirteen Problems*, pp.53-71, Harper Collins Publishers.

-----(2003): "El club de los martes", *Muerte en la vicaría/La señorita Marple y trece problemas*,

pp.261-273, Randam House Mondadori, S.A.
-----(2003): "La casa del Ídolo de Astarté", *Muerte en la vicaría/La señorita Marple y trece problemas*, pp.274-288, Randam House Mondadori, S.A.
-----(2003): "Lingotes de oro", *Muerte en la vicaría/La señorita Marple y trece problemas,* pp.289-301, Randam House Mondadori, S.A.
Pérez-Reverte, A. (1995): *La piel del tambor*, Plaza & Janez Editores, S.A.
----- (1998): *The Seville Communion*, Harcourt.